

タバコの有害性と適正価格について

経済学部四年

2106231m

牧野真義

## 要旨

私は今回タバコの有害性と適正価格をテーマとしてとりあげて、考えた。第一章ではタバコの人体へ与える影響が悪いことが医学的に見て明白であることを述べ、また、二章で述べたタバコが経済に与える影響を社会的コストと社会的メリットという概念で考え、それが負であることや、日本のタバコの価格が世界的に見て比較的安いことを述べた。これらを総合的に考えれば少なくとも日本のタバコ税はまだまだ上げても余裕があるものであると考えられる。しかし、タバコの価格弾力性が果たして本当はどれほどの数値になるのか、また喫煙者が喫煙によって得られる精神的効用と嫌煙者の精神的な負の効用がどれほどかということが正確にわからない以上はタバコの適正価格が、本当に私が1999年度医療経済研究機構によるデータを用いて出した944円という数字や1996年度のデータを用いて出した1128円、河野氏の出した1400円という数値になるのかどうかは分からないというのが私の結論だ。

今まで日本のタバコの価格は200円台から徐々に300円台へと突入してはいるが、今後の増税に比べたらまだまだ序章にすぎず、研究データとして用いるには頼りないものだ。今後少しずつ増税をしていき、また、タバコの価格が上がり、タバコの売り上げが減少し、ガムや酒などの代替材に消費が移行していったときに新たにどのような問題が発生するかということに関しても気になるところだ。

タバコ税の増税に賛成する団体なども掲げる理由としてほとんどの団体が河野氏の論文や医療系税研究機構の報告を根拠としているが、それでは考え方がひとつの方向に偏りがちであり、増税に賛成し、タバコによる経済メリットを正確に分析し、増税によっておこるデメリットを分析する研究者がほとんどいないことにも一抹の不安をおぼえる。また、価格を上げることにこだわりすぎているのではないかということも考えられた。今はまだ安価なタバコの価格が上昇することで社会にどのような変化が起こるのか、ブラックボックスな部分が多いので今後の研究が気になるところだ。